

# 『最初の人間』と『涙するまで、生きる』

——アルベール・カミュの小説の映画化をめぐつて——

東 浦 弘 樹  
とうら

名作とよばれる小説を映画化しても、名画が生まれるとはかぎらない。むしろ原作のイメージをそこね、失望させられる——というのは誰もが経験したことがあるだろう。原作を好きであればあるほど期待が大きくなり、ハードルがあがつてしまうからかもしれないが、筆者自身、そのような失望を何度も味わってきた。

アルベール・カミュの作品はこれまでに四度映画化されている。最も古いものは、ルキノ・ヴィスコンティ監督、マルチェロ・マストロヤンニ、アンナ・カリーナ出演の『異邦人』（一九六八年、イタリヤ・フランス・アルジェリア合作）である。この映画は原作を忠実になぞったつもりだが、筆者自身はそれほど面白いとは思わなかった。小説ではムルソーがまわりの人やものを見る——つまり、物語

の語り手であるムルソーがカメラアイの役目を果たしているのに対し、映画ではムルソーを映さざるをえないからである。例えば、死刑判決がおきるシーンで、カメラはマストロヤンニ演じるムルソーの顔を映す。マストロヤンニはできるだけ無表情を装っているのだが、観客はどうしてもそこに悲しみなり絶望なりを読んでしまう。映画というのはそういうものだから仕方がないが、その結果、ムルソーの奇妙な無関心から生まれる小説の味わいは失われてしまうのだ。

もしムルソーを一切画面に出さず、彼の視点にカメラを据えて撮影すれば、自らの感情については何も語らず、目に留まるものを淡々と記述するムルソーの語りを再現できるかもしれない。だが、それが面白いか、そもそもそんな

ものが映画として成立するかというと、疑問であると言わざるをえない。その意味では、『異邦人』は映画化不可能な作品なのかもしれない。

その後、一九九二年に『ベスト』を原作とする映画『ブレイク』（イギリス・フランス・アルゼンチン合作）がライス・ブエンゾ監督、ウィリアム・ハート、ロバート・デユヴァル、ラウル・ジュリア、サンドリーヌ・ボネール出演で制作された。こちらは物語の舞台をアルジェリア第二の都市オランから南米のある町に移したことに始まり、原作に多くの改変を加えた映画である。当時の政情を考えれば、南米を舞台に選んだことは決して悪くないと思うし、恋人に会うために非合法の手段を使って閉鎖された町から出ようとしますが、最後の瞬間に町に残りベストと戦うことを選ぶ新聞記者ランベールを女性に変えて、ヌードシーンまでつくったことにしても、出演者が男ばかりでは色気がなく、多くの観客を集められないという商業的判断がはたらいたのだろうと理解できるし許容できる。しかし、自らの信仰に疑いをもったパヌルー神父が自殺まがいのことをする場面は余計だったと思うし、主人公のリウー医師とともにベストと戦うボランテアグループを組織するタ

ルーの死に方を変えてしまったのは非常に残念である。

原作ではタルーはベストにかかって友人のリウーとその母親に看取られながら死んでいく。彼の死と、それに続く通夜の場面は、物語のクライマックスのひとつであり、個人的に一番好きな場面でもある。しかし、映画はそれを根本から変えてしまった。映画でのタルーの死に方を説明しよう——ベストが終息し、閉ざされていた町の扉が再び開かれ、人々が欲びに酔いしれているのを苦々しく思っている者がひとりだけいる。コタールである。彼は若い頃に犯罪をおかし警察に追われているため、ベストを歓迎した。ベストで町が閉鎖されているかぎり、警察が彼を逮捕しに来ることはないからだ。町の閉鎖が解かれたことに絶望したコタールはアパートの窓から無差別に発砲する。ここまでは原作通りである。しかし、映画は、たまたま近くを通りかかったタルーが流れ弾に当たって死ぬという場面を付け加えた。ベストを生き延びたタルーが不慮の事故で死んでしまうことで「死の不条理性」を表現したつもりかもしれないが、これでは台無しもいいところだ。原作を変えるなと言うつもりはないが、これは改悪と言わざるをえない。

それから時は流れ、カミュ生誕百年にあたる二〇一三年

にフランスは時ならぬカミュブームに沸き返り、カミュに  
関する多くの書籍が出版され、テレビ・ラジオ・新聞・雑  
誌でも頻繁にカミュ特集が組まれた。そのブームに乗った  
というと語弊があるが、カミュの小説を原作とする映画が  
二本たてつづけにつくられた。ジャンニ・アメリオ監督、  
ジャック・ガンブラン主演の『最初の人間』(二〇一一年、  
フランス・イタリア・アルジェリア合作)と、ダヴィッド  
・オールホッフエン監督、ビゴ・モートンセン主演の『涙  
するまで、生きる』(二〇一四年、フランス)である。い  
ずれもアルジェリア独立問題を扱っており、原作を大幅に  
改変した作品だが、それだけに二十一世紀のフランスでカ  
ミュの政治的姿勢がどう評価されているかを考える重要な  
てがかりとなる映画である。

まず、カミュのアルジェリア独立問題に関する姿勢を確  
認しておこう。アルジェリアは一八三〇年から長きにわた  
ってフランスの領土であったが、一九五四年にアルジェリ  
ア民族解放戦線(FLN)が組織され、同年十一月一日に  
一斉に蜂起、戦闘は激化の一途を辿った。アルジェリア生  
まれのフランス人であるカミュは、アルジェリアがフラン  
スの領土にとどまりつつ、一定の自治権をもち、フランス

人とアラブ人、ベルベル人が対等の権利をもつことを望ん  
でいたが、そのような主張が通るような状況ではなく、一  
九五六年一月にアルジェで、一般市民の殺傷の停止を求め  
る「市民休戦」のアピールを行なったたほかは、アルジェリ  
ア問題について沈黙を守ることになる。独立賛成派も反対  
派もカミュのこのような態度を優柔不断ととらえ、カミュ  
を激しく批判した。

一九五七年にカミュは当時としては最年少でノーベル文  
学賞を受賞する。ふつうならば栄光に包まれたと言うべき  
だろうが、カミュの場合はそれが格好の攻撃材料となっ  
た。ノーベル賞は個々の作品に与えられるものではなく、  
ひとりの作家の仕事全体に対して与えられるものである。  
言い換えれば、ノーベル賞を与えられた作家は、自らの仕  
事を終えた作家だということになる。それを踏まえて、カ  
ミュを批判する人々は彼を「終った作家」として扱ったの  
である。

授賞式に出席するためストックホルムを訪れたカミュ  
は、ストックホルム大学で開かれた学生との討論会に出席  
するが、その席上、イスラム教徒のアルジェリア青年がア  
ルジェリア問題に関するカミュの態度を激しく批判した。

そのとき、カミュは「私はこれまでずっとテロを断罪してきた。だから、アルジェの街角で無差別に行なわれているテロも断罪しなければならない。いつの日か、私の母や家族が犠牲になるかもしれないのだ」と前置きしたうえで、「私は正義を信じる。しかし、正義よりも前に私の母を守るだろう」と答えた。誠実かつ正当なことばであり、感動的でさえあると思うが、カミュを批判する人々はそれさえも攻撃材料とした。

しかし、カミュに一体何が言えただろう。アルジェリア生まれのフランス人というのがカミュのアイデンティティである。アルジェリアかフランスか、どちらかひとつを選べと言われても、選べるはずがない。選べということ自体がおかしいのだ。カミュは一九六〇年一月に交通事故で死亡し、アルジェリアはその二年半後の一九六二年七月に独立を果たすが、その際、まさにカミュが恐れていたことが起こった。アルジェリアに住むフランス人は、フランス国籍かアルジェリア国籍のどちらかを選ばねばならず、フランス国籍を選んだ場合はアルジェリアを出て行かねばならなかったのである。

アルジェリア独立後もカミュを批判する風潮は続いた。

例えばポストコロニアルの思想家として名高いエドワード・W・サイードは一九九三年刊行の『文化と帝国主義』の中でカミュに一章を割り、カミュには「(アルジェリアにおける)フランスの領土強奪と政治的統治を拒絶する」という「より困難で挑戦的な選択もありえたはずだ」と述べて、カミュがアルジェリア独立運動を支持しなかったことを批判し、『異邦人』はアルジェリアを植民地化したフランス人がフランス人の読者のために書いた「植民者の文章」だと断罪している。しかし、映画『最初の人間』と『涙するまで、生きる』はともにアラブ人とフランス人の融和を描いており、カミュの立場を再評価しているように思われる。

カミュの遺作となった未完の自伝的小説『最初の人間』は、「現在」と「過去」が入り混じる複雑な構成をとった作品である。物語はカミュの分身とも言うべき主人公ジャック・コルムリイが両親の旅の途中にアルジェリアの田舎の村で生まれる場面からはじまるが、それに続く章では四十歳になったジャックが第一次大戦で戦死した父親の墓を訪れるところが描かれている。その後、アルジェの実家に

帰り、母親と再会するジャックの「現在」と彼の「過去」——子ども時代の回想——が交錯する形で物語は進んでいく。

映画も同様の構成をとっているが、「過去」の部分が原作にはほぼ忠実であるのに対し、「現在」の部分は大半が映画のために新たにつくられたものである。「現在」の部分で原作通りなのは、ジャックが父親の墓に行き、父親が自分よりずっと若いときに戦死したことに驚くところ（映画ではこの場面がプロローグとしてタイトル前に置かれている）と、父親の生きた跡を求めて自分が生まれた田舎の村を訪ね、そこに住んでいる農園主と話をするとところ（ただで、有名な作家になったジャックがアルジェで平和と対話のためのアピールを行なうところや、彼が中学に進学できるようにはたらきかけてくれた恩師のベルナル先生と会うところや、小学校のとき同級生だったアラブ人の息子が独立派のメンバーとして逮捕されたのを救うために尽力するところや、ラジオに出演しアルジェリア問題を語るところや、子どもの頃同居していたエチエンヌ叔父に会うため養老院に行くところや、母親にフランスに来るようすすめるところなどは原作にはない。

このうち最初のエピソードは、カミュが一九五六年にアルジェの「進歩クラブ会館」で「市民休戦」のアピールを行なったという伝記的事実をもとにしたものである。ただし、単純なミスなのか、あるいは何らかの意図があったのか、映画ではジャックのアピールは一九五七年にアルジェ大学で行なわれるという設定になっている。また、カミュは独立反対派と賛成派の両方が討論会に臨席することを望み、実際そのようになったが、映画では会に出席しているのはほとんどフランス人で、彼らの多くはジャックを「裏切り者」とみなし罵倒する。このシーンは映画の序盤にあるだけに、監督はそれによって当時の緊迫した状況を示したかったのであろう。

非常に興味深いのは、討論会の後、ジャックが実家の母親を訪ねる場面である。アパートの下にアラブ人の老人が座っている。彼はジャックと顔見知りのようで、母親は買い物に行つて留守だと、フランス語で言う。ジャックは「サイド」と老人をファーストネームで呼び、アラブ語で「シユ克蘭（ありがとう）」と答え、市場に母親を迎えに行くと言う。別れ際、老人はジャックに *C'est via qu'il y a la guerre entre nous?* と尋ねる。日本語字幕では

「戦争になるんでしょか」となっているが、直訳すれば「私たちの間に戦争があるというのは本当でしょうか」という意味である。老人にはジャックやジャックの母親と自分が敵味方に分かれて戦っているとはとても思えないのだ。ジャックは老人を見つめ、黙って首を横に振り、老人を安心させるように少し微笑んで立ち去る。この場面は近所に住む人間として長年暮らしてきたサイドとジャックやその母親が、歴史の流れによって引き裂かれてしまうという悲劇的な状況を示しているが、同時にフランス人とアラブ人の共生の可能性を示唆しているとも言えよう。直前の討論会のシーンで声高に政治的主張をしていた人々——「歴史」の側に立つ人々——とジャックは共存できない。しかし、ジャックや彼の母親とサイドは——ということとはつまり市井に生きる庶民は——民族や宗教の溝を越えて共存できるし、実際そうしてきたのである。

小学校のときの同級生ハムッドとその息子にまつわるエピソードも同じ方向を向いている。ジャックはハムッドに会うためカスバに赴く。細い路の入り組んだカスバはアラブ人たちが住む地区であり、独立運動の拠点である。フランス人が入り込むようなところではない。人々はジャック

を好奇の目で見る。ジャックはアラブ語で道を尋ねる。カミュがアラブ語をどの程度喋れたか筆者は知らない。喋れたとしてもおそらく片言程度であったと推測できるが、映画のジャックはアラブ語をかなり流暢に使えるようである。

ジャックとハムッドは決して仲のいい友達ではなかった。ハムッドは優等生のジャックを嫌い、よく喧嘩をしていた。とはいえ、ベルナル先生に「どちらが先に殴った？」と尋ねられてハムッドが「僕です」と答えることから、彼が真つすぐな少年であったことが示されている。ハムッドは爆弾テロの濡れ衣を着せられて勾留されている息子を助けて欲しいとジャックに頼む。ふたりの会話で興味深いのは、「フランス人はみんな嘘つきだ」というハムッドに対して、ジャックが「僕はアルジェリア人だ」と答えるところである。彼の頭の中では、フランス人であれアラブ人であれ、アルジェリアに生まれ育った者はみなアルジェリア人なのである。

ジャックはハムッドの息子の釈放のため奔走し、ハムッドは息子との面会が許される。「お前の無実を証明したい」と言うハムッドに、息子は「僕は無実じゃない」と答え

る。彼は濡れ衣を着せられたのではなく、本当に爆弾テログループの一員だったのである。その直後にジャックはアルジェの町で爆弾テロを目撃する。ハムッドの息子は真面目で誠実な青年である。しかし、彼は決して無垢ではない。彼が仕掛けた爆弾が何の罪もない市民を、さらに言えばジャックの母親を殺すかもしれないということをこのシーンに示している。

映画の終盤ではハムッドの息子の葬式が描かれ、それを受けてジャックがラジオで話をする場面がある。ジャックのことは映画用に書かれたものであろうが、分裂よりも連帯を訴え、人種を問わずすべての住民に平等な権利が与えられることを求めるところや、愛する者を傷つけるおそれがあるものとして無差別テロを弾劾するところ、とりわけ「私は正義を信じる。アラブ人諸君に言う。私は何としても君たちを守る。私の母を敵としないかぎりは。なぜなら母もまた不正と苦痛に耐えてきたからだ」というところは、カミュがストックホルムで語ったことを思わせるものがあり、非常にカミュ的である。

ラストでジャックは母親とふたりでアパートで食事をしている。なぜアルジェにとどまるのかと尋ねるジャック

に、母親は「フランスは美しいわ。でも、アラブ人がいないもの」と答える。年老いた母親にとっていまさら見知らぬフランスに行くって暮らすのは苦痛でしかないだろう、だから適当なことを言っただと考えることもできる。しかし、このことはもまたフランス人とアラブ人の共生の可能性を示唆していると解釈できる。彼女にとって、アラブ人がまわりにいることはごく当たり前のことであり、それがない生活など考えられないのである。

やがてカメラはジャックを、ついで母親を大写しにする。その後、カメラが引いて食卓が映るが、ジャックはもういない。彼が使っていた食器もなくなっている。彼は母親のもとを去り、フランスに戻ったということなのだろうか。それともジャックとカミュを同一視し、ジャックが死んだことを示唆しているのだろうか。いずれにせよ、母親が立ち上がり、窓から町を眺めた後、錠戸を閉めるところで映画は終る。

この映画が名作と呼べるかどうかは、筆者にはわからない。作者と作中人物を同一視していることについては評価が分かれるだろうし、原作を冒瀆していると考ええる人がいてもおかしくはない。しかし、ジャックが（ということとは

つまりカミュが）フランス人とアラブ人の共生のアイコンとして描かれていることは注目に値する。

では次に『涙するまで、生きる』をみてみよう。これは短編集『追放と王国』に収められた『客』を原作とする作品で、原題は *Loin des hommes*（「人間から遠く」）である。『客』はカミュの作品の中で最も悲観的な作品のひとつである。時はアルジェリア戦争勃発の直前——主人公のダリュはアルジェリア南部の砂漠地帯の小学校で住み込みの教員として働いている。田舎の分校だから、教師は彼しかおらず、地域一帯が干ばつに襲われているため、生徒も全く来ない。あるとき憲兵のバルデュッシがアラブ人の囚人を連れてやって来る。彼はダリュに囚人を一晩学校に泊めて、翌日町の警察署に連れていくよう命じる。ダリュは断るが、バルデュッシが囚人を置いて行ってしまうので、仕方なく囚人に食事と寝床を与える。つまらないことで争いになり従兄を殺してしまった囚人に対しダリュは怒りと嫌悪を覚えるが、同じ部屋で一夜を過ごすうち、ふたりの間には不思議な絆が生まれる。翌朝、ダリュは囚人を小高い丘の上に連れて行き、食糧と金を渡し、東へ向かう道と南

へ向かう道を指し示す。東には町があり警察署がある、南には遊牧民が住んでいる、どちらの道を行くかは自分で決めると言って、彼は囚人をその場に置き去りにする。彼はそのまま振り返らずに歩き続けるが、やがて我慢ができなくなり丘の上に戻る。彼の目に映るのは、町への道——牢獄への道——をたどる囚人の姿である。やがて小学校に戻ったダリュは教室の黒板にへたくそな字で「お前は兄弟を引き渡した。必ず報いがくるぞ」と書かれているのに気付く。「ダリュは空を眺め、高原を眺め、さらにその彼方の海までのびている目に見えぬ土地を眺めていた。これほど愛したこの広大な国に、彼はひとりぼっちでいた」という文がこの物語を結んでいる。

『客』はダリュとアラブ人の囚人の間に生まれた心の絆が歴史の大きなうねりの中で押し流されてしまう悲劇を描いている。ダリュはどちらの道を選ぶかを囚人に任せる。しかし、彼自身は囚人が自由への道を選ぶことを望んでいたのである。囚人がなぜ牢獄への道を選ぶのかは書かれていない。しかし、おそらくそうすることがダリュを喜ばせるだろうと思ったからだと推測できる。つまり、ダリュは囚人のために思って行動し、囚人はダリュのために思って



行動したのだ。たとえ、そのために命を投げ出すことになろうとも（「命を投げ出す」というのは比喩ではない。町へ行って逮捕されれば、囚人は確実に死刑を宣告されるだろう）。しかし、そのような互いを思いやる気持ちは、第三者には理解されない。武装蜂起を準備している独立派のアラブ人にとって、ダリユは憎むべき敵でしかないのである。

映画『涙するまで、生きる』はこの物語を大胆に改変している。ダリユと囚人が朝を迎えるところまでは多少の異同はあれ、ほぼ原作通りだが、それ以降は完全なオリジナルストーリーである。朝、馬に乗ったアラブ人たちが突然あらわれる。彼らは囚人が住んでいた村の住民で、自分たちの仲間を殺した囚人をリンチにかけようとしている。銃をとったダリユと彼らの間で銃撃戦が起こる。原作からはとても考えられないアクション映画のような展開である。村人を追い返した後、ダリユは囚人を追い出し、ひとりで町へ行けと言うが、思い直して彼を護送することにする。ふたりが出かけようとしたとき、今度はフランス人たちがやって来る。彼らは前夜、家畜が殺されたと言い、囚人をその犯人と決めつけて引き渡しを要求する。ダリユは要求

を拒み、銃をつきつけて彼らを追い返す。こうしてアラブ人からもフランス人からも追われるふたりの逃避行が始まる。『人間から遠く』という原題はおそらくそのことを表しているのである。

道中、ダリユは囚人を追ってきたアラブ人を射殺する。その後、ふたりは蜂起した独立派のグループに捕まる。洞窟に隠れていたグループをフランスの軍隊が襲撃し、降伏したアラブ人まで撃ち殺してしまう。違法行為だと抗議するダリユを無視して、フランス軍は立ち去り、ふたりは旅を続ける。ふたりはダリユの生まれた村に行く。ダリユによれば、彼の両親はスペイン系で、紙の原料となるエスパルトの農園で働いていたとのことである。「エスパルトの農園で働くフランス人など見たことがない」という囚人に、彼は「当時フランス人にとって自分たちはアラブ人だった。いまアラブ人にとって自分たちはフランス人だ」と答える。ダリユはフランス人社会にもアラブ人社会にも属さない人間なのである。

ダリユは囚人を村の娼館に連れて行き、女を知らないという囚人に娼婦をあてがう。村を出て三叉路にさしかかったところでふたりは立ち止まる。ここでダリユは原作通り

囚人に二つの道を指し示す。だが、原作とは違い、彼は自由への道を選ぶよう囚人に言う。囚人は町の警察署に行き、裁判を受け、死刑になることが自分の義務だと思っ  
ている。彼が死ななければ、復讐を求める村人たちが家族に  
何をするかわからないからだ。しかし、「村人にはお前が  
死刑になったと言っておく」というダリユのことばに安心  
したのか、彼の友情に心えねばならないと思っただのか、囚  
人は自由への道を選ぶ。

学校に戻ったダリユは、翌朝なにごともなかったかのよ  
うに生徒を迎える。しかし、彼は突然、「今日で学校を辞  
める」と言う。やむをえなかつたとはいえ人を殺してしま  
つたからだろうか、それとも学校にとどまることが危険に  
なつてきたからだろうか、そもそも彼の辞職は前から決ま  
つていたことなのか、それとも前夜のうちに決意したこと  
なのか、一切説明がないまま、映画は終る。

『涙するまで、生きる』は原作の『客』以上にダリユと  
囚人の心の絆を強調した物語である。『客』ではアラブ人  
の囚人に名前はない。しかし、『涙するまで、生きる』で  
はモハメッドという名前が与えられている。また、『客』  
ではダリユと囚人はほとんど話をしないが、『涙するまで、

生きる』ではあるときはフランス語で、またあるときはア  
ラブ語で互いに身の上を語る。『客』のアラブ人は「小麦  
の貸し借り」が原因で従兄を殺した事になっている。そ  
れは『涙するまで、生きる』でも同じだが、映画ではそれ  
が家族の死活問題となっている。小麦を取られてしまえ  
ば、家族は飢え死にするしかないのだ。『客』ではアラブ  
人はつまらない理由で従兄を殺した愚か者だが、『涙する  
まで、生きる』では家族を守るために命をかける勇者なの  
である。

『涙するまで、生きる』はフランス人とアラブ人の友情  
の物語である。原作のもつ悲劇性を捨象したこの作品は、  
甘いと言えば確かに甘いし、非常にわかりやすい作品であ  
る。映画の芸術性という点から考えて、それがいいことが  
どうか、筆者にはわからない。だが、『最初の人間』と同  
じく、『涙するまで、生きる』がフランス人とアラブ人の  
共生の可能性を提示する作品であることに変わりはない。

最初に述べたように、カミュはアルジェリア戦争当時、  
独立派からも反独立派からも激しく批判され孤立した。  
『異邦人』に登場するアラブ人——レエモンの愛人やその

兄弟やその仲間たち——に名前がないこと、アルジェリアのオランを舞台とする『ペスト』にアラブ人が登場しないことまであげつらい、カミュにレイシストのレッテルを貼ろうとする批評家もいる。そのカミュの作品が、二十一世紀に入って、フランス人とアラブ人の絆や共生を描くものとして映画化されたことは、カミュの政治的姿勢に対する評価が変わってきたことを意味している。二〇一五年一月七日にシャルリー・エブドー社が襲撃され、同年十一月十三日にパリとその郊外で同時に三つのテロが起き、白人とイスラム教徒との対立が高まっている現在、カミュの思想や作品は再評価されてしかるべきであろう。カミュはわれわれの同時代人なのである。

以上、カミュの小説を映画化した作品について述べてきたが、それ以外にもカミュに関するノンフィクション映画が4本つくられている。『アルベール・カミュ、幸福の悲劇』（二〇〇九年）、『アルベール・カミュ、政治参加したジャーナリスト』（二〇一二年）、『カミュと生きる』（二〇一三年）、『カミュ／サルトル、引き裂かれた友情』（二〇一四年）である。いずれもジョエル・カルメット監督の作品で、残念ながら日本では未公開だが、三作目の『カミュ

と生きる』には筆者も出演している。これらの作品についても論じてみたいが、それは別の機会に譲ることにしよう。